

文学は富士山をどのように描写してきたのでしょうか？

いにしえより「信仰の対象」であり「芸術の源泉」であった富士山を、人々はなんとかして言葉に表し、文字に記そうとしてきました。

噴火活動の盛んな状況下においては、富士山は登る山ではなく、遠くから眺め振り仰ぐ山として文学に描かれますが、室町時代には、一般の人々の登拝も始まり、江戸時代になると富士講による登山や山頂の様子を記した作品も現れます。

幕末以降、外国人の富士登山やそれに伴う紀行文が次々に著されるようになります。また、御殿場口登山道が開かれ近代登山が行われるようになるなど、富士山の文学も急激に多様化していきます。

富士山の文学は、噴火活動や、政治・文化の変化や、人々の富士山観などさまざまな面を反映し、成り立っているのです。

今回のセミナーでは、富士山に「登る」ということに焦点を当て、文学作品を通して富士山と富士登山の多様な側面について考えていきます。



静岡県富士山世界遺産センター
平成 29年12月23日開館予定

program

プログラム

世界遺産センターの概要説明

(13:30~13:45)

田代一葉

(静岡県富士山世界遺産センター 主任研究員)

「古典文学と富士登山

—富士山は登る山か?— (13:45~14:15)

ハドソン・マーク

(静岡県富士山世界遺産センター 教授)

「富士山と人類世 ~幕末・明治の欧米人から見る登山と文学~」

(14:15~14:45)

勝又 基

(明星大学 教授)

「御殿場から見た江戸の富士山文化」

(15:00~16:00)

講演者略歴 (講演順)

田代一葉 (たしろ かづは)

静岡県富士山世界遺産センター主任研究員。博士(文学)。専門は日本文学、和歌史。主要著書『近世和歌画賛の研究』(汲古書院、2013年)、『形成される教養 十七世紀日本の〈知〉』(鈴木健一編、勉誠出版、2015年)など。

ハドソン・マーク (Mark J. Hudson)

静岡県富士山世界遺産センター教授。博士(先史人類学)。専門は人類学および環境人類学。主要著書 *Ruins of Identity: Ethnogenesis in the Japanese Islands* (Univ. of Hawaii Press, 1999年)、*Multidisciplinary Studies of the Environment and Culture* (Routledge, 2017年) など。

勝又 基 (かつまた もと)

御殿場市出身。明星大学人文学部日本文学学科教授。博士(文学)。専門は日本近世文学、日本近世文化。主要著書『親孝行の江戸文化』(笠間書院、2017年)、『孝子を訪ねる旅 江戸期社会を支えた人々』(三弥井書店、2015年) など。